

# ひさよし 武藤久由 漆塗職人 伝統工芸士 巻頭特集

## 漆の世界に魅せられて

全国的に見ても豪華な仏壇が好まれてきた名古屋。

その西部に位置する弥富周辺には、昔から仏壇にかかわる職人が多かった。分業による仏壇制作で、漆塗を担うのが武藤久由さん。父親の跡を継ぎ、2代目として活躍する。仏壇にとどまらず、漆のあらゆる可能性を探り続ける武藤さんに話を聞いた。



職人としての人生を決定づけた父親による美しい漆塗り

8人きょうだいで育った先代は、早くに父親を亡くした。親に代わって就職先を見つけてきたのは、兄だった。「伯父が私の父に決めてきた仕事で、武藤久由さん。職人の仕事どころか、もちろん漆に触れたこともない。しかし三重県の長島から16歳で修業に入った守夫さんは、飲み込みも腕もよかった。「親方のところで重宝され、独立したのは28歳のとき。仕事に就いてから長い月日が流れていました」という。

当時、弥富を含む海部地区は名古屋仏壇の生産地として知られた。名古屋仏壇のはじまりは元禄年間にさかのぼり、宮大工や寺大工職人たちが仏壇を製造していたと考えら

れている。宮殿御坊造を代表とする豪華な構造で知られ、木曽川の水害から守るために台が高いのも特徴だ。

仏壇は彫刻や蒔絵など、分業でつくられる。名古屋仏壇は「木地師」「荘厳師」「彫刻師」「塗り師」「蒔絵師」「外金物師」「内金物師」「箔置き師」の「八職」が存在する。武藤さん一家は、このうちの「塗り師」として木地に漆塗を施す。

両親に職人への道を勧められたことは、一度もない。むしろ母親は、厳しい世界に入ることを強く反対した。自宅に工房を構え、もくもくと仕事に打ち込む父親の姿を見て育った武藤さんは、高校を卒業すると大学へ進学する。理系で学び、実験や研究を重ねた。大学3年生で就職活動を始めると、福利厚生や給与などで仕事を選択することに違和感を抱

き、活動には積極的になれなかった。そこで、ふと実家に足を運ぶ。その日が、まさに武藤さんにとってのターニングポイントだろう。「壁に立てかけられていた塗り板があまりに美しかった。うちは、こんなにも素晴らしい仕事をしていただけと感動すら覚えました」と振り返る。

**無限の可能性を追求して漆と向き合う日々**

大学を卒業すると、両親のもとで漆塗の仕事始めた。他の親方の工房での修業も考えたが、ただでさえ同年代の職人と比べて出遅れている遅れを取り戻すために、最初から「武藤の技術」を手に入れることを選んだ。「この素晴らしい技術を途切れさせたくない。その気持ちが大きく働きました」と振り返る。

漆は何層にも重ねて表面の美しさを



1.ガラスと漆の組み合わせでつくり上げるぐい呑み。漆と金箔、そして向こう側が見えるガラスと、素材の違いがマッチしている 2.漆塗に使われる道具はさまざま。塗りを始める前にはヘラを使って丁寧に漆と刷毛なじませる



伝統工芸士 漆塗職人 武藤久由さん

を見せる。下地の作業は母親の幸子さんが見務めていた。久由さんも、2年間は下地のみを担当。父親の仕事を見つめ続けた。「どんな姿勢で漆を塗るか、刷毛の角度はどうなっているか、呼吸のひとつまで父親の仕事に見入りました」という。3年目で、はじめて漆を塗る作業を任せられた。しかし、うまくいかない。経験が大切だと、大きな仏壇の仕事に任されたが失敗の繰り返し。何度も塗り直しをした。「貴重な仏壇の仕事をする責任感や『武藤』の名前で次の工程に受け渡す重責も感じました。失敗も成功のための重要な経験だと分かってからは、前向きに仕事ができるようになりましたね」と話す。

工房にはお猪口やグラスなど、木以外のものに漆を塗った作品が並ぶ。すべて武藤さんによるもので、「木以外に漆を塗ると、どんな表情を見せるんだらうという好奇心からです」と笑顔を見せる。

ライフスタイルの変化により、大型の仏壇を置く家は減った。この先、漆の魅力を知ってもらうには、仏壇以外の何かが必要だと考えたのが始まり。「石に塗ってみたり、釣り糸に垂らしてみたり、振

り子のように刷毛を揺らしながら垂らしてみたり、いろいろとしました。先日は工房前に張っていた蜘蛛の巣に霧吹きで吹きかけてみました」と、思いもよらぬものと漆の組み合わせを楽しんでいる。「思った通りにならないものが多いし、仕事に直接生かせないこともある。でも、それも大事なデータなんです」と理系出身ならではの言葉が飛び出した。さまざまな作家が来店するクリエイターズマーケットに、飾り物や切子のグラスを出してみたこともある。そこには、「漆の魅力を知ってもらいたい」という気持ちが働いている。

「自分が世の中に出すものは、漆の美しさを表現したものでないといけない。私が学生時代に見て心を動かされた父親の塗った仏壇のように」と言葉を強める。武藤さんは、これからも探求心をもって、美術品でありながら生活に寄り添った作品を生み続けていく。



湿気を浴びることで固まる漆。樹液である生漆（きうるし）は生成色であり、そこに鉄を含ませることで漆黒、色粉を混ぜて赤漆をつくる